

Weekly Michael's News

<今週の聖句>

2019年1月28日発行 No.96 最終号

『イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。』
(ルカによる福音書 4: 20~21)

<週刊チャプレン通信もついに最終号!! 3年間の働きに心からの感謝と祈りを込めて…。>

2018年度の授業が先週末で終了となるのに合わせて、チャペルで行われてきた昼の礼拝も今年度最後となりました。3月末で退職する予定の私にとっても最後の昼礼拝、これまでの取り組みを想いながらの15分となりました。3年前、初めて訪れた神戸国際大学キリスト教センター、そしてチャペル。規模的には小さいけれど、この不思議な空間の持つ静けさとパイプオルガンの存在感に圧倒されました。昼礼拝の参加者がどうやったら増えるかと苦心したり（今年度の昼礼拝出席者総数は3,946人、総礼拝回数150回、平均26,3人でした!! ご協力下さった皆様に心から感謝します!!）学内のキリスト教的な雰囲気盛り上げるため聖書の言葉を掲示したり（教授会を通さずに勝手に貼って怒られました…(^_^;)）、キリスト教センターで起こる出来事や礼拝で話される面白くて内容の濃いメッセージを少しでも多くの人に知ってもらいたいという願いからチャプレン通信を毎週発行してきました。礼拝を通して多くの学生との接点が与えられました。キリスト教センターに顔を出してくれる学生は皆、真摯な姿勢で礼拝を支えてくれました。緊張しながらも、自分の経験を堂々と語ってくれたその姿に深く感動した事も、一度や二度ではありませんでした。KIUのチャペルには、確かに成長する学生の「命」が生きています。それを支えようとする教職員の「協力」があります。何より学院創立から半世紀続いてきた「祈り」があります。これら小さな取り組みが、これからもKIUの土台を確かに支える力となる事を心からお祈りしています!! 本当にありがとうございました!!



3年前、初めて訪れたキリスト教センター



チャペルの静けさに驚き



それぞれ楽しみ方を持ち寄る学生



積極的・意欲的な姿勢で礼拝を支えてくれた学生サーバーの皆さん 誠実な言葉に心揺さぶられる事も

<先週のメッセージ>

※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています

1月21日(月) テーマ:『『見えないもの』に気づき始めた人たち』 野間 光顕(チャプレン)

先日行われた「課外活動指導者研修会」で、びわこ成蹊スポーツ大学の副学長:豊田則成先生から興味深い言葉を聞く事ができた。豊田先生の専門はスポーツ心理学で、数多くの代表選手を主に以て外面でサポートをされている。この日の講演では、昨今特に重要となる言葉として「インテグリティ」という言葉を掲げておられた。「健全性」や「誠実性」を指す言葉だが、五輪が近づく日本の競技現場では、極度の勝利至上主義が貫かれる事で、競技自体が崩壊するような深刻な問題が生じている。しかし一方で、最近大切な場面で力を発揮する為、心の状態を重視するアスリートが増えているという。混沌とした世界の中で先行きが見えない時代を歩む私たちが、一人ひとりの内にある「見えないもの」の確かな存在を感じながら共に歩みを進めて行きたい。

1月22日(火) テーマ:「空手が教えてくれたこと」 山口 幸(経済学部)

先日、1年で最も寒い「大寒」に、毎年恒例となる空手の寒稽古で海に入った。気温は5度、冬の海の冷たさは筆舌に尽くし難く、「寒い」「冷たい」というより「痛い」という言葉があちこちで漏れる。厳しい稽古を終えた後、海から上がり熱燗とおでんで体を温めるのが、何よりの至福の一時。もう今年で辞めたいと思いつつもなぜか毎年続けている。私と空手の出会いは、小学校に入ったばかりの6歳の時。昔は暴力的な指導も多かったが、現在指導者となった私は、個々の自主性に基つき、能力を引き出すような指導を心掛けています。私は、空手から学んだ事が2つある。1つは、努力を続ける事の大切さだ。空手の稽古は、同じ事を何十年も繰り返し行う。苦しい努力を積み重ねた結果、ようやく技術を習得できる。30年以上稽古を続けた今でも、日々新たな発見があり、空手の奥深さを感じさせられる。これが日々の生活や仕事の中でも諦めずに努力を続ける姿勢に繋がっているようにも思う。もう一つは空手を通じて世界中の仲間と繋がれる事だ。幼少の頃、師匠は「空手は道着1つで世界中に友達を作れる」といつも言われていた。外国留学時に、町の道場で出会った仲間とは15年以上経った今でも家族ぐるみで交流を持つ。神戸の道場には、ベルギー、ドイツ、アメリカ、NZ、インドネシア、中国と様々な国の人がいて、日本人以上に真剣に稽古を重ねている。逆にその姿勢から学ばされているほどだ。東京五輪を機に、日本が世界に誇る武道「空手」に興味を持つ人が増える事を願う。

1月25日(金) テーマ:「KIUへのラストメッセージ」 野間 光顕(チャプレン)

現代社会を取り巻く言葉の劣化はひどく、特に昨年は日本を牽引する政治家の発する言葉の質そのものが崩壊した年だった。そもそも、なぜこんな嘘や虚偽が吹聴されるようになったのだろうか? その舌の根には、とにかく早く結果求める、我慢の中で話し合いを重ね合意を形成するよりも、自分と意見の違う相手を攻撃して切り捨てる事で無駄を徹底的に省く、そんな合理性・経済性を最優先した生き方があるように思う。そんな中で、私たちは何を指標として歩めば良いのだろうか? その確かな答えを、私はこのKIUの中に見出す。KIUは創立から半世紀以上、土台にあるキリスト教を守り続けている。小さなキャンパスの片隅にひっそりと立つ十字架、静かに佇むチャペル。そこで毎日行われるわずか15分の昼礼拝だが、そこに割かれる労力は決して小さくない。ほぼ全員の教授が奨励を担当し、職員や学生も協力して参加してくれている。どこの大学も、生き残るために無駄を省き、経費削減に努める時代に、KIUはブれる事なく、半世紀の歩みを踏まえながら、自らの向かう先に確かな希望を見出している。KIUに息づく「ゆとり」と「静けさ」は、集う学生・働く教職員の中に「生きる力」を確かに養う。今日の聖句、イザヤ書40章「草は枯れ 花はしぼむが 私たちの神の言葉はとこしえ

に立つ」が示すように、時代や歴史をも超越される主がこれからも神戸国際大学を豊かに導かれる事を心から願い祈りたい。3年間本当にありがとうございました。（文責：野間 光顕）